



Title	兵庫県立ピッコロ劇団第74回公演『から騒ぎ』（令和4年10月8日・ピッコロシアター）
Author(s)	伊藤，晃
Citation	演劇学論叢. 2024, 23, p. 55-56
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/94766
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

■令和4年度

観劇実習レポート

この実習は毎年演劇学研究室が行っているもので、異なるジャンルの作品を四〜五本観劇する授業である。学部生から院生までが参加し、受講者は事前の予習、観劇後にレポート提出を行う。(観劇した演目は「研究室の窓」に掲載)掲載した五本の観劇評は、令和四年度観劇実習における学生レポートから選ばれた。

観劇レポートがいわゆる一般的な劇評と異なるのは、受講生が必ずしもそのジャンルに精通しているわけではないことだ。しかしこの授業において必要なのは、むしろ新しいジャンルに接触した時に感じる新鮮な驚きや違和感を丹念に言語化する作業である。各ジャンルはともすれば蛸壺化しがちだが、受講生のレポートはそのような問題に取り組むうえで示唆に富む意見を投げかけている。学生たちの率直な意見から研究室の日頃の取り組みが伝われば幸いである。

兵庫県立ピッコロ劇団第74回公演『から騒ぎ』(令和4年10月8日・ピッコロシアター大ホール)

伊藤 晃

本レポートでは、今回観劇したピッコロ劇団による『から騒ぎ』について、舞台装置に焦点を当てて論じていきたい。

まず初めに、今回の公演における舞台装置がどのようなもので

あったのかについて簡単にまとめる。舞台中央には大きな門、両脇には柵があり、その柵の手前にはそれぞれ一つずつベンチが置かれ、舞台全体には木や植え込みを模したパネルがいくつも立てられており、舞台上部には破れた布のような形をしたパネルが吊り下げられている。これら全ての舞台装置は白と黒を基調としており、木や植え込みを模したパネルと上部に吊り下げられたパネルに関しては、どちらも白と黒のハリキンチェック柄が採用されている。また、これらのパネルの一部には顔が覗ける程の穴が設けられており、これらは一部の場面において活用されている。舞台中央の門は回転可能であり、一方の面は主に白で彩色され、もう一方の面は主に黒で彩色されている。ベンチに関しては、上手に置かれたベンチと下手に置かれたベンチでそれぞれ配色方法が微妙に異なっている。上手のものは、座る部分の板の色が黒であり、足の部分が白であった一方、下手のものは、上手のものと配色が逆になっている。舞台両脇に置かれた柵は白を基調としており、これらの柵を含め、基本的にほぼすべての舞台装置は自由に動かせるようになっていた。

先述したように、今回の舞台装置は白と黒を基調としており、そのコントラストが印象的に演出へと活かされている。『から騒ぎ』は、ヒーローとクローデオや、ベアトリスとベネディックといった、「男女」間の恋愛関係を中心としながら物語が進んでいく^①。また、各登場人物が自分自身の、あるいは他人の生き方や命の在り方について語る場面がいくつかが描かれていることから、「生と死」という存在を感じ取ることができる。そして、様々な登場人物が嘘を付いたり、逆に真実が暴かれたりするなど、「嘘と真実」の存在も描かれる。以上の点からは、『から騒ぎ』が「男と女」「嘘と真実」「生

と死」といった二項対立的なものを扱った作品であると解釈することが可能であり、今回の上演における舞台装置は、これらの要素を「白と黒」によって象徴的に表現しているといえる。「生と死」に関しては、ヒーローが婚礼の儀式において侮辱されショック死してしまったと勘違いされる場面を例に考えることができる。この場面では、しばらくの間、クロードイオにヒーローが死んだと思わせる計画が立てられ、ヒーローは死んだふりをする間、どこかに身を隠すこととなる。ヒーローが身を潜める、すなわち「死んだ」ふりを実行するために舞台を去る際、彼女は門の白い側面から黒い面へと通り抜けて去っていく。そしてその後、クロードイオとヒーローが改めて婚礼の儀式を行う際、ヒーローは門の黒い面のある側から白い面のある側へ通り抜けて登場し、実は彼女が「生きていた」ということが明らかになる。これは、白が象徴する「生」の空間と、黒の象徴する「死」の空間の間における移動を表していると解釈可能だ。「嘘と真実」に関しては、物語の前半においてドン・ジョンとその子分が悪だくみをする場面を例に取り上げたい。この場面において、初めて中央の門が回転する。その際、観客席に対し白い面を向けていた門は、回転したことで観客席に対して黒い面を向けることになる。門がこのような状態になったところでドン・ジョンが登場し、どのような「嘘」によって周囲の人間を貶めるかについて子分と共に思案する。ここでは、「嘘」を操る存在であるドン・ジョンという存在が「黒」の中で象徴的に描かれているといえるだろう。また、先述した改めて行われた婚礼の儀式の場面では、様々な真実が一举に明らかとなる。ここでは、「真実」が「白」の中で象徴的に描かれていると考えることができる。

ここまで述べてきた「嘘と真実」は、「白と黒」だけでなく、舞台上、そして吊り物のパネルに描かれた「ハリキンチェック」とも関係している。この柄は、道化師の衣装で使用されることの多いものである。「から騒ぎ」の戯曲において、ベネディックは「道化師」扱われる場面がみられる。またベネディックだけでなく、この戯曲の登場人物は様々な形で「嘘と真実」に翻弄されながら「空騒ぎ」し、観客に笑いを提供しているという点で「道化師」であると捉えることができる。このような「道化師」を連想させる「ハリキンチェック」が舞台上のいたるところに配置されていることは、この作品が喜劇であることを観客へより強く印象付ける効果がある。

本レポートでは、主に舞台装置の色彩と柄に着目し、それが持つ象徴性や観客の解釈にもたらす影響について考察した。この考察では、今回扱った『から騒ぎ』の上演以外のものを比較・分析することができなかった。上記で述べた考察を基に、他の劇団による過去の上演や今回以降の上演と比較・分析し検討していくことで、さらに論を深め、展開していくことができるだろう。

参考文献

小田島雄志訳「から騒ぎ」『シェイクスピア全集 Ⅲ』、一九八六年、白水社、七―七一頁。

注

(1) 本公演におけるパンフレットにも、「シェイクスピア恋愛喜劇の傑作」という表現がみられる。